

---

# 初恋のはじまり

カイリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初恋のはじまり

### 【Nコード】

N7141Y

### 【作者名】

カイリ

### 【あらすじ】

恋だ愛だがわからないあのころ。

急に誰が好きかだなんて聞かれても意味もわからなかった。

周りに馬鹿にされるから本当のこととも言われなかった。

あれから何年か経って同窓会が開かれた。

櫻井 丈志<sup>たけし</sup>。

それが彼の名前。

あれは小学校高学年だった。

私は上手に友達つきあいができない子供で、いつも教室で一人きりだった。

というか、私の言動に誰もついてこれなかったのが本当のところ  
で。

女らしくない女。

男女。

物おじしない奴。

それが私のクラスでの評価だった。

ある日、ぎゃあぎゃああと騒がしいクラスに耐えられずに、教室の真横にある屋上に続く階段に座って小説を読んでいたら、クラスの派手な女の子たちが何やら含み笑いをしながら私に向かって話しかけてきた。

こんなことは滅多にない。

この子たちはクラスの人間を誰でも友人だと勘違いしている節があつて、クラスで浮きまくっている私も友達と思い込んでいる。そして自分たちの思い通りに友達を操れると考えていた。はた迷惑な話だ。

「ねえねえ、『ぽこだ』」

『ぽこだ』というのは私に対するこの子がつけたあだ名だ。

名字の奥田からきているそうだけど、何をどういじくったら『ぽこだ』になるのかまったくもって判らない。

「何？」

「ぼこだつてさー、誰が好きなの？」

「はあ？ いったい何を言っている？」

呆れて相手を見てみると、彼女の後ろに控えていた数人の女の子もそわそわとして私の答えを待っていた。

「……別にいいけど？」

「えーっ！ そんなのおかしいよ！」

「何がおかしい？」

別に好きな子がいるようがいまいがあんたには関係ないでしょうが。「クラスのみんなに聞いて回ってんだよー？ みんないるのにぼこだけいないなんておかしいじゃん！」

「みんながいるから私もいるって考えてるほうがおかしいと思うけどね」

ひどーい、きつーいと後ろの女の子たちが騒ぐ。

目の前にいる子もぎりつと唇を噛んで私を睨んでくるし。

恥をかかされてるでも思ってるのかな。

でも私にしてみたらそんなことを聞くほうがおかしいと思うけど。この子たちの考えてることなんてさっぱりわからないのが現状だ。「……じゃあさ。誰か付き合いやすい子っている？」

ああ、それなら

「櫻井、かな？ 櫻井はいい奴だし」

「へええ。櫻井くんかあ」

なにやらしたり顔でうなづくと、今度は後ろに控えてる子たちとこそそそと相談をして「じゃあ」と笑いながら教室に戻って行った。わけがわからない。

それが彼女たちに対する評価だった。

一瞬だけそのことを考えると、馬鹿らしくなって、膝の上に乗せたままの小説の続きを読み始めた。

昼休みの、少しだけ長い休み時間が終わって教室に戻ると、なに

やら私をちらちらと見ながらくすくすと笑っている女の子たちの集団があちこちで見られた。

男子は男子で私と目線を合わそうともしないし。ちよつとだけ不愉快に眉をひそめたけれど、いつもの無関心を装って席についた。

机の上には折りたたまれた紙が一枚。

意味がわからずその紙を広げてみると

『ぼこだは櫻井が好き』

ハートマークや音符などの絵文字が小さくて丸い文字を不必要に飾り立てていた。

なぜこんなことをする必要があるのか？理解できない。

それでもこんなことをしたのであるう当人を探して教室内を見回しても、誰も私を見ようとしないうし、逆に私を大声で囃したててあざ笑う。

馬鹿らしすぎる。

手に持った紙を握りつぶしてそのままゴミ箱に捨てに行こうとしたら、目の前に櫻井が立っていた。その手には私が握りつぶしたものと同じ紙。

「奥田、これ」

「あー。うん。ごめん」

いや別に私が謝る必要はないと思うけれども、でも櫻井に迷惑をかけたのは間違いないと思うからとりあえず謝った。

さっきまでうるさかった教室内がしんと静まり返る。

そして嫌になるほどの緊張感が場を支配した。

「お前の字じゃないよ、な？」

「まあねえ。私ならそんな絵文字使わないよ」

「そうだよな」

その言葉と同時にくしゃりと紙を握りつぶして、櫻井はゴミ箱にぱいとソレを投げ捨てた。

続いて私も櫻井にならう。

ざわざわと、教室内にざわめきがゆつくりと戻ってきて、つまりないという声がそこかしこに聞こえてくる。

うんざりする。

どうしてそんなことに労力を使いたがるのか理解しがたい。

けれども、櫻井とはこれ以降卒業するまで話す機会を得られなかった。

彼女たちの噂話のネタ提供者にはなりたくなかったのが本音だった。

うちの小学校の生徒は、そのまま全員が同じ中学校に持ち上がるわけじゃない。

学校側が任意で越境入学を認めているせいがある。

それは小学校区が異常なほど広くて、隣の中学だったら10分で通えるのに自分の学区の中学校なら自転車通学やバス通学をしなければならぬからだ。

そんな理由で櫻井と彼女たちとは別の中学に通うことになった。

最後の登校である卒業式の日、櫻井から告白された。

「お前のことが好きだった」

「うん。私も好きだったよ」

ただ、二人ともそれは恋愛などではなく、友達としての好きなんだということが分かっていった。

だからこそ、クラスのうわさ好きで人を陥れるのが大好きな女の子たちの餌食にはなりたくはなかった。

「元気で」

それが最後の言葉だった。

「懐かしいな」

屋上に続く階段の踊り場で、櫻井はそう呟いた。

「懐かしいね」

あの当時は同じような身長だったのに、今では頭一つ分の差がでてしまった。

高校に入ってしばらくしたころ。

廊下ですれ違ったけばけしく飾り立てた子が声をかけてきた。

「あれ？ぼこだ？」

『ぼこだ』という言葉には不愉快な思いしかなかったが、やはりその思いは正しかったのだろう、声をかけてきたのは六年生の時のあのクラスメイトの女の子だった。

「ああ。久しぶり」

「うわあ。ぼこだはかわんないねえ。相変わらずだね」

「そっちこそ、変わらないね」

思わず苦笑してしまう。

あの時の女の子はあの時のままの性格であの時のまま成長をしていないようだった。

「今度さ、同窓会するんだよ。ぼこだもきなよ」

確かに同窓会のはがきを受け取っていたが、この子から上から視線で言われる覚えはないんだが。

そんな風に思っていると「きつとだよ」と言って喧騒とともに去って行った。

やはりあいかわらず自分勝手な女の子だった。

もちろん同窓会には行く予定だった。

それは同窓会の往復ハガキの隅に書かれていた言葉のせいだ。

『久しぶり。必ず来てほしい』

幹事である櫻井からのメッセージ。

そうして今わたしと櫻井は六年生のときに使っていた教室の真横にある階段の踊り場にたたずんでいる。

背中には窓から差し込む夕日の温かさがじんわりと感じられる。

頭一つ分大きくなった櫻井は、あの頃の面影もあまりなく、男らしく成長した。

けれどもやはり櫻井は櫻井で。

同窓会が始まって、幹事として忙しく動き回っていたが、私の横を通り過ぎる時にすつと手の中に紙を握らされた。

あのときの、くしゃくしゃにした紙

どきりとした。

思わず櫻井を見ると、まるで何事もないように他の子に話しかけていた。

同窓会がお開きになって後に階段に向かうと、そこには先客がすでに座っていた。

櫻井。

「待ってた」

「うん」

「好きだ」

「うん」

さきほど渡された紙と一緒に、私が自分で書いた紙を櫻井に渡した。

『奥田は櫻井が好き』

「……知ってる」

「そだね」

階段に座っている櫻井に手を差し出して、踊り場に連れていく。

「ずっとこの上で座ってた」

「私はこの下で本を読んだよ」

お互いの存在を階段を通して知っていた。

そしていろんなことをみんなに聞こえないほどの声で話したね。恋じゃないって思ってた。

彼女たちのいう『好き』じゃないって思ってた。

それが離れていた三年間で間違いだって気がついた。

まさか同じことを櫻井も思っていたなんて思わなかったよ。



櫻井が私の手を取った。

私はその手を握り返した。

そして二人で歩いて帰った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7141y/>

---

初恋のはじまり

2011年11月21日12時06分発行